The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	夢の書の行方 : 敦煌本『新集周公解夢書』の研究
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1995, 29, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6009
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

夢の書の行方

――敦煌本『新集周公解夢書』の研究――

湯浅邦弘

序言

甚だしきかな吾が衰へたるや、久しきかな吾れ復た夢に周公を見ず。（『論語』述而篇）

かつて孔子は、自らの衰えを、このように述べたという。ここに言う周公とは、周の文王の第四子、周公旦のことであり、兄の武王を補佐して西周の基盤を確立し、孔子によって理想の人とされた偉大な聖人である。

『論語』に見えるこの孔子の嘆きは、孔子と夢、精神と夢、天命と夢などの関係をめぐって様々な論議を呼ぶこととなるが[1]、一方、周公の側も、この孔子の一言によって、後世、夢とは不可分の存在となって行った。

二十世紀初頭、甘粛省敦煌の莫高窟に於て発見された『新集周公解夢書』は、この周公旦に仮託された占夢書の写本であり、完本としては現存最古の貴重な資料である。筆写時期は唐代と考えられ、また「新集」とあることから、それ以前に一旦成立していた『周公解夢書』を拡充・整理したものと推測されている[2]。

これまで筆者は、中国古代の夢観の展開を様々な角度から検討して来ているが、本稿では、この『新集周公解夢書』を中心的資料として更に検討を進めてみることとしたい。

一

『新集周公解夢書』は、全二十三章から成るが、本篇の前に、凡そ百五十字から成る序文が置かれている。ここではまず、この序文を手掛りに、本書の基本的な夢観を明らかにしておきたい。まず前半部では、夢の発生原因が「夢は是れ神遊、依附し髣髴たり」と述べられている。これは、睡眠中の精神が肉体を離れて浮遊し、他の事物を見聞することによって夢が生ずるという観念であり、例えば後漢の王充がこれを俗信として当時の鬼神論と共に厳しく批判する如く、古来の代表的な夢観の一つである。ただ「精神」の浮遊とは言っても、こうした夢観が吉凶を記した占夢書の冒頭で語られることから明らかな如く、これは決して、人間精神の追究といった方向へ進展する夢観ではない。一旦肉体を離脱し浮遊した魂魄が声なき天命を予知した後、肉体に復帰すると考える訳である。つまり、夢は天と人とを結ぶ貴重な媒介であり、未来の吉凶を予見する重要な手段であると考えられているのである。

また、後半部には、夢の意義・結果に関して次のような一節が見える。

悪夢は之を理(おさ)むべし。夫れ夢は好きことを見れば即ち吉、悪（しきことを見れば）即ち憂う。若し智者之を解すれば、悪夢も即ち吉（となり）、愚人之を説けば、好夢も変じて凶と為るなり。

ここで注目されるのは、まず比較的単純に夢が好夢・悪夢に二分されていること、またその好・悪は決定的なも

のではなく、それを解する人間によって変化し得るとされている点である。即ち、夢自体よりも、夢見た後の人為が問題にされているのである。こうした夢観は、従来、『夢書』の佚文として広く知られていた次の一節にもほぼ同様に窺うことができる。

夢なる者は像なり。精気動くなり。魂魄身を離れ、神往来するなり。……夢なる者は其の人に語げて過失を預見せしむ。如し其れ賢者ならば、之を知りて自ら改革するなり。(『太平御覧』巻三九七引)

ここでも、重要なのは、夢の内容それ自体ではなく、夢見の後の人間の言動、即ち「自ら改革する」ことであるとされている。

こうした人為重視を特徴とする夢観の思想的淵源は、既に漢代の諸思想の中に存在する。例えば王符である。王符はその著『潛夫論』の中に「夢列」篇を設け、夢を十分類にして例示し、夢の発生原因や意義について論及するなど、夢について相当の探究を行なっている。しかし王符の議論は最終的に、次のような修徳論へと展開して行く。

凡そ人の瑞を見て徳を修むる者は福必ず成り、瑞を見て縦恣(ほしいまま)にする者は福転じて禍と為る。妖を見て驕侮する者は禍必ず成り、妖を見て戒懼する者は禍転じて福と為る。(『潛夫論』夢列)

即ち王符は、「瑞」「妖」という夢の内容が決定的・固定的なものではなく、より重要なのは、それを見た後の人間の言動であると説くのである。仮に「瑞」を見ても、「修徳」者は「福」という啓示通りの結果を得るが、「縦恣」者は一旦予定された「福」が転じて「禍」という結果を得るというのである。つまり、ここでは、「瑞」

夢を見たからと言って「縦恣に」し、また「妖」夢を無視して「驕侮」するという人間の愚行が批判されているのである。王符の夢は、一見科学的に探究されているようであって、結局はこうした修徳論の中に包摂されて行くのである。(3)

また、こうした夢観は、断片的ながら、漢代の諸書にも次のように見える。

・天子夢悪しければ則ち道を修め、諸侯夢悪しければ則ち政を修め、大夫夢悪しければ則ち身を修む。(『新書』春秋)

・諸侯夢悪しければ則ち徳を修め、大夫夢悪しければ則ち官を修め、士夢悪しければ則ち身を修む。(『新序』雑事)

・故に妖孽なる者は天の天子諸侯を警する所以なり。悪夢なる者は士大夫を警する所以なり。故に妖孽は善政に勝たず、悪夢も善行に勝たず。至治の極みには、禍も反って福と為る。(『説苑』敬慎)

これらがその後の中国の夢観の展開を示唆する重要な見解であることについては既に前稿に於て論述した通りであるが、右の『新集周公解夢書』等の夢観は、そうした予想を夢書の側から裏付けるものであると言えよう。『新集周公解夢書』は、この書が、天命の絶対的な啓示としてではなく、むしろ夢見た後の人為のためにあることを、自ら宣言しているのである。

二

それでは、『新集周公解夢書』の本篇は、どのような構成・内容になっているのであろうか。次にこうした観点から、本書の特徴を検討してみたい。本篇全二十三章の内訳は次の通りである。

(1)天文章、(2)地理章、(3)山林草木章、(4)水火盗賊章、(5)官禄兄第章、(6)人身梳鏡章、(7)飲食章、(8)仏道音楽章、(9)荘園田宅章、(10)衣服章、(11)六畜禽獣章、(12)龍蛇章、(13)刀剣弓弩章、(14)夫妻花粉章、(15)楼閣家具銭帛章、(16)舟車橋市穀（物）章、(17)生死疲病章、(18)冢墓棺財凶具章、(19)十二支日得夢章、(20)十二時得夢章、(21)建除満日得夢章、(22)悪夢為無禁忌等章、(23)猒攘悪夢章

これらは、その性格によってほぼ三群に分類できると思われる。第一は、夢の中に現れた事物を基準に分類したもの（(1)～(18)）で、本書の基本的な分類方法であると言える。第二は、夢とそれを見た日時との関係によって分類したもの（(19)(20)(21)）で、(19)は子日・丑日……戌日・亥日という十二支の日毎に、(20)は同じく十二支の時刻毎に、また(21)は、建日・除日・満日……収日・開日・閉日という十二辰の日毎に、その夢の吉凶を記している。そして第三は、悪夢に関するもの（(22)(23)）で、(22)は悪夢避けとなる二十の禁忌を列挙し、(23)は見てしまった悪夢を攘う方法を記している。

以上三群の内、分量的に最も多く、本書の基本的分類となっているのは、第一群（(1)～(18)）である。ここでは夢を、天文・地理・山林草木など、ほぼ天・地・人の枠組に沿って分類しているが、こうした分類方法は、中国古代の百科全書「類書」に窺うことのできる特徴的な方法である。

従来、『夢書』は完本の形では伝わらず、『北堂書鈔』『芸文類聚』『太平御覧』等の類書にその佚文が採録されるのみであった。これら類書は、『夢書』佚文を、天・地・人事・器物・飲食・草木等の各篇中に「夢書曰……」として節録するのである。(4) こうした夢書の生産と歴代類書の編纂との先後関係は一概には言えないものの、恐らく両者は相俟って、中国の夢の認識や分類に大きな影響を与えてきたと考えられる。即ち、中国の夢は、類書の分類に端的に見えるような、事物の側に力点を置いた枠組によって認識・整理されてきたと推測されるのである。

事実、同じく敦煌発見の『夢書』残簡や『周公解夢書』残簡も、あくまで残簡ではあるが、その構成は、天部・日月部、或いは天事・地理・雑事等、『新集周公解夢書』や類書の分類を髣髴とさせる。また、後の元代の成立と推定されている『居家必用事類』中の解夢の項も、「夢天文星耀等物」「夢雷雨風電等物」「夢山川土石等物」など、その分類は『新集周公解夢書』と大同小異であり、最後に「獸夢符籙」という悪夢攘いの篇が置かれているのも同様である。更に、明代・劉基の『断夢秘書』も、総編と言うべき上編「説夢」に続いて、中編「断夢」では、やはり「天文類」「地輿類」「倫常類」等に分類し、下編「徵夢」には「異夢」「妖夢」「怪夢」など悪夢に関する章が置かれている。そして、これらの夢書を含め、古来の夢の記事を集大成したと言える明・陳士元の『夢占逸旨』も、巻一(真宰・長柳等)、巻二(聖人・六夢等)以外は、「天者」「日月」「雷雨」(巻三)、「山川」「形貌」「食衣」(巻四)、「器物」「財貨」「筆墨」「字画」(巻五)の如く、基本的には類書および従来の夢書の分類を踏襲している。

先述のように、古代中国では、夢の発生原因を魂魄の離脱・浮遊と考える場合があった。これは、人間の精神と夢との関係について更なる探究を促す貴重な観念でもあった。しかしながら、中国の夢の考察は、そうした方向へ

は容易には進展せず、先の王符の夢観に見られたように、また、これら夢書の分類に見られるように、夢に現れた事物を手がかりにその吉凶を予知せんとする方向へ、更にはそれらを自省の具とする修徳論へと展開して行ったのである。

それでは、これらの占夢書は、どのような言辞によって構成されているのか。次に、『新集周公解夢書』の具体的解夢を取り上げてその特質を検討することにしたい。

三

一例として、まず天文章冒頭の五条を掲げる（①②等の番号は筆者）。

①夢に上天を見る者は、貴子を生む。
②夢に天の明るきを見る者は、大吉に合す。
③夢に天を看るを見る者は、主長命。
④夢に天・帝・釈を見る者は、大吉。
⑤夢に天を見る者は、主財を得。

このように、『新集周公解夢書』の各条文は、「夢にAを見る者は（見れば）、B」という形に定型化されている。Aは夢に現われた事物、Bは、更に、直接吉凶を記すもの（④）と吉凶の具体的内容を記すもの（①②③⑤）とに二分される。ただ、いずれにしてもこの天文章は、天に関する事物が基本的に瑞兆であるため、「夢に（天

の）崩るるを見れば、年大荒なり」（⑥）のような反例を除けば、大吉であることは容易に推測し得る。また、こうした事情は他の章に於てもほぼ同様であり、「夢に地陥るを見る者は宅安からず」（地理章②）では大地の陥没が「宅不安」という占断となり、「夢に樹木を見る者は大吉なること有り」（山林草木章③）では「樹木」の夢が「大吉」とされている。これらの背後には、大地が基本的に安定している（吉）、また、樹木が植物・生物の成長を象徴する（吉）という極めて常識的な観念が存在しているであろう。

ところが、次のように、夢の内容と占断との間にやや距離があると思われる場合もある。

夢に土を運びて宅に入るを見る者は、大吉なり。（地理章⑥）

この夢がなぜ大吉なのかについては、若干の説明を要するであろう。もっとも、素朴に考えても、土は生物や鉱物の源であり、また家・国の領域を象徴するから吉であるとも推測し得る。しかし、明・陳士元の『夢林玄解』を参考にすると、今少しの意味付けが必要となるようである。『夢林玄解』地理部に、「土块を夢みるは大吉。土は金を生じ、利の象なり」とある。つまり、木→火→土→金→水という五行相生の観念からも、土は金を生み出す利の象徴なのである。即ちこの夢は、即物的にも、また観念的にも利を連想させるのである。このように、『新集周公解夢書』には、夢の内容と占断との間に若干の補足説明を必要とするものもあるが、いずれにしてもこうした解夢の方法は、大局的に見れば、象徴解釈であると言えるであろう。

また、こうした特質は、『新集周公解夢書』のみならず、従来『太平御覧』等の類書に採録されていた『夢書』の残簡や、同じく敦煌発見の『夢書』残簡についてもほぼ同様に窺うことができる。

電光を夢みれば、県官と為る。（『北堂書鈔』巻一五二引『夢書』）

例えば右の佚文では、「電光」の夢が「県官と為る」兆しとされているが、ここには、雷が貴人誕生伝説に重要な役割を果たしたり、[5] また雷が万物の発生や成長を促したりするという観念が作用しているであろう。[6]

また次のように、その事物が何を象徴するかを予め説明している条文も存在する。

城は人君たり。一（ある）いは県尊たり。夢に城を見る者は、人君に見ゆるなり。夢に新城を築けば、功名有り。（『太平御覧』巻九二引『夢書』）

ここでは、「城」の意味が予め「人君」或いは「県尊（知事）」と説明されている。そして、こうしたイメージを踏まえて夢の意味が解説されて行くのである。これは、『新集周公解夢書』には見られない文型であり、A「夢の中に現われた事物」とB「その占断」に加えて、C「その事物のイメージの説明」の三者によって構成されていると言える。これらの『夢書』を集成したと思われる陳士元の『夢林玄解』でも、夢の中の事物について、逐一そのイメージを説明している点に特徴がある。

しかし、これらは、事物に基づく連想を読者の側に委ねているか、予め編者の側が説明しているかの違いに過ぎず、やはり大局的には、事物の象徴によって占断を導かんとする象徴解釈法であると言える。

先に筆者は、中国の解夢の方法を数種に分類整理してみたことがあるが、時代の進展とともに大勢を占めて行くのは、この象徴解釈法であった。[7] こうした解釈法の変遷が中国の占夢者の盛衰やその質的変化と密接な関係にある

ことについても、既に論述した通りであるが、そうした変化は右の如く、占夢書の側についてもほぼ同様に言えると思われる。その点について、次に章を改め論述してみることとしたい。

四

中国の占夢書の歴史は古く、既に『漢書』芸文志に『黄帝長柳占夢十一巻』『甘徳長柳占夢二十巻』なる占夢書が記録されている。しかし残念ながら、これらを含め、漢代以前の占夢書は残存しておらず、その内容は不明である。ただ、当時の占夢書の内容を推測し得る手掛りは存在する。

まず、『周礼』春官・占夢には、占夢の官が「日月星辰を以て六夢の吉凶を占」ったとあり、『史記』亀策列伝には、元王の見た夢を博士衛平が「天を仰ぎ月の光を視、斗の指す所を観」て、その吉凶を占ったとある。また、史書に登場する著名な占夢者は、「史墨」(『左伝』昭公31年)、「史敦」(『史記』封禅書)、史援(同、趙世家)など、いずれも史官、或いは史官的性格を持つ人物である。これらは、本来の占夢が史官によって行なわれる専門的な秘術であったこと、またそれが天文観測を併用して行なわれる極めて高度な占術であったことを物語っている。そして、こうした専門的占術に使用される占夢書の姿は、恐らく右の『新集周公解夢書』等とはかなり異質であったと推測される。先述の如く、『新集周公解夢書』等の内容は、史官や占夢者といった特殊な人物でなくとも容易に理解し得る平易なものであった。事物に関するごく常識的なイメージを持っていれば、誰にでも利用できると言えよう。しかし占候・卜占等と併用された古代の占夢の術は、決してそのようなものではなかったと考えられる。

また、『晏子春秋』に見える次の故事も、占夢書の存在を伝える貴重な資料である。

「水」の病にかかった斉の景公が、二つの太陽と戦い敗れるという不吉な夢を見た。これを聞いた宰相の晏子は、直ちに占夢者を召し出した。占夢者は占夢書を参照して占断を下したいと言う。しかし晏子はそれを制し、景公の（水）病は陰であり、太陽は陽である。この夢は二陽が一陰に勝つ、即ち景公の病が癒える予兆であると述べ、この言葉をそのまま景公に言上せよと占夢者に命じた。占夢者は、晏子に言われた通りの言葉を占断の言として景公に奏上し、景公の病は三日後に癒えたという。[8] この故事について、筆者は先に、占夢者の地位や存在意義といった観点から考察を加えたことがあるが、[9] ここでは占夢書に焦点を当てて考えてみたい。

ここで、召し出された占夢者は、占夢書を参照したいと述べ、即断を避けている。では、この占夢者は、即断の下せぬ凡庸な占夢者であったのか。しかし、後に景公は、この占夢者の言を信じて快癒したのであり、晏子の狙いも正にそこにあったのであるから、この占夢者は決して愚昧な人物ではなかった筈である。それでは、夢の内容が複雑・重大すぎて即断できなかったのか。恐らくそうした要因もあろうが、やはり、当時の占夢術・占夢書が『新集周公解夢書』等に比べて今少し複雑・難解なものであり、君主お抱えの占夢者であっても、基本的には占夢書を参照する必要があったと推測されるのである。もとより、この故事が事実であったか否かを議論するのは見当違いであろうが、少なくとも占夢者・占夢書・占夢の術についての当時の観念を窺い得る重要な資料であると言えよう。[10]

これらの資料から推測される占夢書に比べて、『新集周公解夢書』等の内容は、それほどの専門性を持たぬ、むしろ万人向けの言辞で構成されていると言える。高名な占夢者がこの書を参照せねば占断を下せないというような複雑な内容ではない。またその思想的内容も、先の天文章④「夢に天・帝・釈を見る者は大吉」に端的に表れている通り、儒・道・仏三教が渾然一体となっている。即ち、特定の思想的基盤に立脚して編集されたというよりは、

むしろ、六朝から唐代に至る三教融合的思想状況を漠然と反映しつつ、やはり、より一般的な読者を想定して編纂されたと考えられる。

南宋の洪邁は、占夢の術が魏晋以降衰退の道を辿り、ほぼ宋代までに滅んだと述べているが、[11]そうした占夢の術の命運は、占夢者、そして占夢書の盛衰とも軌を一にしているのである。古代、史官の職掌であった占夢の術は、後漢時代あたりを一つの転機として、その特殊性・専門性を喪失し、世俗化・大衆化して行く。占夢者の地位低下も顕著となり、厳君平は自らを「卜筮者は賤業」（『漢書』王貢両龔鮑伝）と蔑む。しかし、夢が人間の生理的現象である以上、夢に対する人間の感情が消滅することはない。公的舞台での占夢の衰退とは裏腹に、夢に関する記事はその後も史書や詩文を彩ることとなる。そして、占夢の書もまた、『新集周公解夢書』に見えるような形で編纂され続けたのである。

即ち、中国の占夢書は、占夢者・占夢の術とともに、世俗化・形骸化の道を辿り、更には、『夢占逸旨』の如く、占断のためと言うよりは、むしろ記録・集成を目的として編纂されるようになる。そのことは、古代の夢書が『黄帝長柳占夢』『甘徳長柳占夢』の如く「占夢」の名を持っていたのに対し、後には「夢書」「解夢書」の如き名称へと変化して行った点にも、或いは表われているかもしれない。かつて、国家や君主の死生存亡にさえ関与した占夢書は、その地位を儒家の経典『易経』に譲ってからは、徐々にその権威および専門性・秘術性を喪失し、個々人の安心立命のための解夢書へとその役割を転じて行ったのである。

しかし、それら解夢書は、古代の夢を完全に忘却してしまった訳ではない。まず、先に確認した『新集周公解夢書』の内、第二群（⒆～㉑）は、夢とそれを見た日時との関係によって吉凶を記したものであった。それらは、十

二支の日毎・時刻毎、十二辰の日毎という極めて単純なものではあるが、古代、占夢が天文観測を併用して行なわれたという『史記』等の記述を想起させる。『新集周公解夢書』はこの点に於て、古代の記憶を微かに保存していると言えるであろう。

また、第三群（㉒㉓）は、悪夢に関する章であったが、これも、夢と人間との深い関わりを示唆していると思われる。白川静氏は、卜辞の研究を通して「夢」字の夢魔としての性格を強調し、また澤田瑞穂氏は、悪夢追放の風習が清朝・民国期に於ても存在したことを明らかにするが、[12] こうした夢に対する恐怖の意識も、予兆夢に匹敵する今一つの夢観として看過し得ない。『新集周公解夢書』を初め、『居家必用事類』解夢、『断夢秘書』等には、いずれもこうした悪夢に関する章が付されているが、これらも、悪夢と人間との不可分の関係を雄弁に物語っているのではなかろうか。

結　語

以上、本稿では、敦煌本『新集周公解夢書』を中心的資料として、中国古代の夢観の展開を、夢書の変容という視角から検討してきた。中国の占夢書は、人々の夢観や占夢者・占夢の術の盛衰と密接な関係を保ちながら生産され続けた。それらは概して、世俗化・形骸化への道を辿り、更には記録・集成という資料的性格を帯びて行くこととなる。しかし、そこには常に、夢に対する人々の意識が投映されていたと考えられる。

更に、個々の解夢の言辞は、当時の事物に対する人々のイメージを探る上でも、極めて貴重な資料となり得るように思われる。無論、各時代には優れた字書・辞典が編纂されており、我々も、それらを通して当時の事物の意味

を知ることはできる。しかし、その意味の更に彼方にあるイメージを把握するのは、そう容易ではない。これら夢書は幸いにも、類書の如き分類によって、天・地・人のあらゆる事物に関するイメージを提供してくれる。従って、これらを分析・整理して行けば、一種のイメージ辞典を構成することも可能となるであろう。『新集周公解夢書』等は我々に、そうした夢をも与えてくれるのである。

注

(1) 拙稿「孔子と夢と天命と――『論語』甚矣吾衰章解釈と儒家の夢観――」(『日本中国学会報』第四二集、一九九〇年)、及び「孔子の夢と朱子学の夢論」(『島根大学教育学部紀要』第二四巻第一号、一九九〇年)参照。

(2) 『新集周公解夢書』の概況を紹介したものとして、劉文英氏『中国古代夢書』(中華書局、一九九〇年)、盧元勛氏等『占夢術注評』(雲龍出版社、一九九四年)、陳美英氏等『中華占夢術』(文津出版社、一九九五年)などがある。

(3) 詳細については、拙稿「中国古代の夢と占夢」(『島根大学教育学部紀要』第二二巻二号、一九八八年)参照。

(4) 但し、『芸文類聚』のように、夢書の佚文を各篇中に引用すると同時に、特に「夢」の部を設けて夢に関する記事を採録した類書もある。

(5) 例えば、既に黄帝誕生伝説の中にも雷光が登場する。

(6) 『周易』説卦伝。

(7) 注(3)の拙稿参照。

(8) 『晏子春秋』内篇雜下。

(9) 注(3)の拙稿参照。

(10) もっとも、晏子にとって、もはや占夢書は権威を持たず、必要であったのは占夢者の頭ではなく口であることが分かる。この故事は、当時に於ける占夢者・占夢書・占夢の術の存在やその権威を表すと同時に、その衰退をも示唆する貴重な資料であったと言えよう。

（11）『容斎随筆』続筆、古人占夢。

（12）白川氏『中国古代の民俗』（講談社、一九八〇年）、『字統』（平凡社、一九八四年）、澤田氏『中国の呪法』（平河出版、一九八四年）など。

（文学部助教授）